

Title	公開授業における相互研修の効果と問題点
Author(s)	石村, 雅雄
Citation	京都大学高等教育研究 (1998), 4: 15-21
Issue Date	1998-10-01
URL	http://hdl.handle.net/2433/53546
Right	
Type	Departmental Bulletin Paper
Textversion	publisher

「公開授業における相互研修の効果と問題点」

石 村 雅 雄

(京都大学高等教育教授システム開発センター)

Effect and Problems of Mutual Training through Open Laboratory Class's Experience in Kyoto University

ISHIMURA Masao

(Research Center for Higher Education, Kyoto University)

1 公開授業における相互研修に関する問題の所在

近年の大学改革、とりわけ大学教育改革の進展という状況において、大学の授業の改善は意識のある先達者による個人的、局所的試みの域を越え、より多くの改善者、より広い領域において試みられるものとなっている。「画期的な新制大学の創設にもかかわらず、わが国の大学教育は依然として旧態を踏襲し、改善・改革の論はあってもほとんど実りのない状態を続けてきた」¹⁾ことからの脱却の契機が出現していることは明らかである。

しかし、具体的にこうした大学授業改善の試みをさらに普遍的に、さらに多くの教員を巻き込む形で展開するには依然として多くの課題があることも明らかである。その多くの課題のうち、本稿が引き受けようとしている課題は、大学授業改善の集団的取り組みにかかるものである。大学審議会は、先の中間まとめの中で、「個々の教員の教育内容・方法の改善のため、全学的に、あるいは学部・学科全体で、……教育内容・方法についての組織的な研究・研修（ファカルティ・ディベロップメント）を実施することが重要になっている。一部大学でこうした取組が緒についたところであるが、大学全体として未だ不十分な状況にある」²⁾としているが、この組織的な研修について、その可能性も含めて、研修の意味、展開の仕方、問題点の抽出を試みるものである。授業改善の試みの組織論と言い換えてもいいかもしれない。私たちは、今回の公開実験授業についての試みを為す上で、「大学は専門的自決性をもつ研究者・教師集団によって構成される場だから、FD（教授団の成長）は、『相互』研修によるほかはない」（田中毎実）という前提を立てているが、本稿は広くその「相互」研修の在り方を追求するものであるとも言える。

尚、本報告で対象にしている公開実験授業及び授業研究会は、1996年4月より開催されており、初年度は18回、2年度は20回、今年度は前期終了までに10回の延べ48回開催している。授業研究会に参加した参観者（報道関係者は除く）は、初年度は3～6人（平均4.5人）、2年度は4～9人（平均6.25人）、今年度は8～13人（平均10.5人）となっており、年々参観者の輪は広がりつつある。

2 授業を「見る」ことの意味はどこにあるのか——授業参観の有効性——

本項については、授業を「見る」ことの意味は何よりも、大学における教授—学習過程に無関心な大学教員の意識改革にあることを別稿で指摘し、さらに、1年目の公開実験授業を素材として、①学生の現実の把握、②共同授業実践への展望に繋がる、同一・近接学問の中での自らの授業実践の位置付け、③授業の技術的な問題の客観的認識、④教授者以外の参観者の授業場面での存在の有効性、⑤広く大学教育を考える端緒、の5点を指摘した³⁾。以下には、2年目以降の公開実験授業で得られた知見を加えてみたい。

①については、具体的な次の例を紹介しておきたい。参観者の岡本敬子（京都大学食糧科学研究所）は⁴⁾、「田中教授は、常に授業検討会において、『学生のコミットが悪い、発言が無い、乗ってこない』ことを気にされていた。この脳内での複雑な作業を“1ステップ”の操作であるかのように、直接、最終段階の結果を要求されていたようである。しかし、このように重く深い事柄を題材に取り上げるとき、“目に見える部分”についてのみ論じ続けていたの

ではいけないのではないか、ということが意識できたように思える」とし、同じく参観者の坪川武弘（福井工業高等専門学校）は、学生の反応の把握の仕方について、授業中に観察できる学生の行動と「何でも帳」で把握できる学生の授業内容の受容の程度を比較しつつ、「私などは聴衆の反応に応じてテンポと内容を変化させることこそが良い授業だと素朴に信じていました。しかし、今回の授業に関しては、そう単純ではないことを目のあたりにしました。授業中における直接的な学生の反応が『にぶく』見えるときも、取り上げられている話題を相当深くとらまえて考えているのだ、と後から判明した場面が多々ありました」としている。この事例は、授業の参観に加え、「何でも帳」の検討、及び学生へのインタビュー結果の検討という授業後の授業検討会での議論を通じて、より客観的に学生の実態が把握できることを示している。

③については、以前、黒板の書き方、資料の配布法等極めて技術的な問題についてまとめたが、それ以上に大きな問題にも関するものでもある。ほとんどの参加者は自らが携わっている、もしくは携わった教育実践に関し、何らかの具体的課題⁹⁾を抱いて公開実験授業に参加する。こうした参加者にとって、この授業は適当な「たたき台」であり、その検討を通しながら、実は自らの教育実践の報告、そして反省に自然に導かれるという図式をもっている。本年度より参加している鳥居伸一郎（京都大学大学院農学研究科）は、学生がゼミで発言しないという問題を抱えて授業に参加し、「なんでも帳」方式に触発されつつ、E-Mailを用いた自らの対処方法を紹介し、双方の問題点につき考察している。

以上の①～⑤の全体については次の2点を指摘しておきたい。まず第1は、授業参観と授業レポートの違いである。前述した①から⑤のうち①と②、とりわけ②については、必ずしも当該の授業に参観者として出席しなくても、授業者が作成した自らの授業についてのレポートを読むこと、さらにはその集団的検討によっても、ある程度の成果は得ることができよう。教員が多忙であるとか、地理的に離れているといった場合には考えられる選択肢であると考えられる。但し、和光大学グループも指摘するように、レポート形式の場合、「本人が書くのだからどうしても不都合なことは省く」という問題の他、「何より一方的な発信と読み流しで終わりがち」という問題が存する¹⁰⁾。

第2は、授業参観が、継続的なものであるのか、単発的なものであるのかによる違いである。今回の我々の試みは、継続的なところにその意味をおいたが、一般の参観者には単発による参観も可能として広報を行った。単発の場合でも、①及び③の面での成果は得られようが、②、⑤の面では継続して参観した方がより効果的であることは明らかである。さらには、本公開実験授業への継続参観では次のことがみられた。つまり、当初、参観者として「何をみるべきなのか」に迷い、授業のおもしろさに引き込まれると学生の反応も良いと思ってしまう、授業研究会では「思いつきをしゃべっていた」ところから、しだいに「授業を見る目＝冷静な参観者としての目」が養われるといったことである。このことに関しては、とりわけ、授業検討会への参加を通じて、継続参観者がひとりよがりの実践解釈の修正を経験し、授業把握の複眼を持つことができるという点も指摘しておきたい。

3 授業を「見る」ことの問題点・課題

この点については、参観対象の授業の専門性と参観者の専門性が融和的である必要性をまず指摘できる¹¹⁾。そして、その上で、参観による授業分析の専門性を参観者の母集団に担保しておく必要がある。つまり、授業改善を展開していく上で、それを担う大学教員集団が「高度な専門性由来する教育内容の排他的な自己決定性をもつ教師集団によって構成される」（田中毎実）ことは、いわば前提とされるべき条件である。しかし、現実には、「排他的な自己決定性」は形式的には集団で保持されつつも、実質的には教員個人によって保持されている。問題は、「高度な専門性」を共有できない教師集団の存在をどうするかということ、であり、より具体的に我々京都大学にとっては「高度一般教育」分野というおそらくその「専門性」を想定しにくい分野において専門性をいかに共有するかという問題なのである。

以上の問題点の他、新たに次の点を指摘しておきたい。つまり、「参観者と教授者、参観者と学生の相互関係、参観者の相互関係」という問題である。

まず前提的に考えねばならないのは、参観者の位置の問題である。参観者は授業の内と外のいずれに位置するのだろうか。我々は参観者を内に位置するものと考え、さらに参観者は「石ころ」ではないと考えた。つまり、参観者が内にいればその影響は不可避であり、問題はその影響をどのようにコントロールするかである。

その上で第1に明らかにすべきは、参観者が教授者に及ぼす影響である。教授者にとって参観者、とりわけ専門を共有する参観者は、意識せざるを得ない、時にはサービスせねばならない、「厄介な存在」であることに変わりはない。前述の通り専門性の共有が、今のところ授業参観の有効性を保障する最良の条件であるとすれば、授業者と参観者の授業中における関係の在り方は特に追求されてしかるべき課題であろう。田中はこの点、「授業者は、参観者に助けられている面はある」としているが、例えば、参観者の注目している方向（例えば寝ている学生への注視）を教授者は気にするか等の問題は未だ十分には把握していない。

第2に明らかにすべきは、参観者の行動が学生に及ぼす影響である。この場合、問題にしているのは、授業中に、直接、参観者が学生とコンタクトするといったことではなく、参観者が間接的に学生に及ぼす影響のことである。例えば、小中学校では「えらい参観者」がいれば生徒も反応し、授業が成功するといったことに関する問題である。本公開実験授業の場合、参観者に対してあまり気にしていないようであったし、実際、気にしていないとの言もあった。しかし、参観者は授業内容に素直に反応して良いのか、例えば、参観者の授業への反応（例えば笑い）に学生が影響を受けることはないのか等今後より詳細に分析していきたい。

参観者と学生との関係では、参観者が「授業補助者」あるいは「授業監視者」としての役割を担うことに対する問題も指摘しておきたい。例えば、マイクはこび、プリントの補充、挙手した学生への教授者への注意喚起等の役割を参観者は積極的に担うべきなのだろうか。この点、理科系の参観者からは、「実験者であるならば、学生からみれば手伝うのは当たり前」との言があったが、参観者がいることによる授業の特殊性の助長に繋がるとの言もあり、今後検討をしていきたい。

但し、むしろ積極的に参観者が存在することを活用していくという選択肢もある。当該の授業に対し、教授者とは異なる「第三者」が授業評価等の授業に関する調査を「客観的」に行う故である。この点、和光大学では、参観者が実施する「教員の授業意図、学生が受講で得たものや要望、生じた変化等を聞くアンケートに、学生、授業者、参観者が互いに独立に答え（自身の以外は推測して）、つき合わせて数量化する試み」（三つ巴作戦）を行っている⁸⁾。本公開実験授業でも、この方式を用い、本年度の6月15日の授業で、「講義中の用語等についてのアンケート調査」と題して、授業で使用された用語の理解度調査を行った⁹⁾。

第3に検討すべきは、参観者相互の関係である。前述した、継続的な参観による「授業を見る目」が養われてきている者、若しくは参観慣れしている者（とりわけ、本センターのスタッフ）が、初めての参観者、1回だけの参観者に及ぼす影響は少なくない。前述のとおり、良い意味で授業の見方が伝わればよいが、現在のところ、ともかくも「他の教員が行っている授業を参観する」という貴重な経験を経てもらうことに意味がある以上、参観に対する純粋な意見、思いを阻害する状況を可能な限り排除することが求められよう。

最後に指摘しておきたいのは、こうした公開実験授業をめぐる「複合的な相互性」の生成は、そのほとんどが1対多で営まれ、参観者などいない大学の授業に関して、この授業の特殊性も生成してしまうことである。この意味で、この種の試み自体、模範的に取り扱ったり、ましてや永続的にするべきものでなく（本実験授業も本年度までの3年を一区切りとしている）、教授者が替わることはもちろん、参観者と形成したネットワークも1度は崩壊させ、また新たな試みとして次の公開実験授業を生成していくという過程をくりかえしていくことが重要である。そして、このくりかえしの中で、より多くの教員が試みに参加し、経験が重層的に積み重ねられていくという図式をたどるように思う。

4 まとめにかえて

本センターは、1998年に、「大学教育の改善に関する京大教官意識調査」（以下「FD調査」）を実施した。その回答の中で、「授業改善のために重要」として選択された第1位は「学生の関心・好奇心を刺激するものとなるように授業内容を工夫すること」（52.8%）であり、以下第2位「授業に関する学生の評価結果を参考にして新たな工夫をすること」（39.3%）、第3位「授業に対する教官の熱意、気力、やる気を高めること」（35.2%）となっている。逆に、「授業改善のために重要でない」とされたのは、第1位「ビデオ等によって記録された自らの授業を視聴すること」（38.8%）、第2位「他の教官によって行われる授業を観察すること」（36.8%）、第3位「優れた授業を視聴すること」（21.2%）となっており、授業改善については、未だ、個人的努力に依存する傾向が強い。とりわけ、本公開

実験授業に関して重視すべきなのは、授業参観の重要性があまり認識されていないことである。本学の場合、一般的に教育内容の決定に際して独立度が高いといわれる日本の大学教員の中でも極めて独立度が高いといわれており、授業参観の有効性、さらには授業改善に関する集团的取組の重要性についての理解の拡大が何よりも重要な課題となっている。

但し、この調査では、本公開実験授業に関して別の前提条件を整える必要があることも明確となっている。というのは、本公開実験授業を「知っているが、参加したことはない」もしくは「知らない」と答えた教員に「今後公開実験授業及び授業研究会に参加したいと思われますか」と聞いたところ「参加する気持ちはない」としたものが44.2%であったものの、「参加したいが実際には難しい」としたものも47.7%あった。さらに、その理由（「参加する気持ちはない」もしくは「参加したいが実際には難しい」とした理由）を聞いた問いについては「非常に多忙で時間的余裕がない」としたものが、74.8%を占めたのである。授業参観による授業改善、教員研修だけでなく、広く大学教育の改善を図るためには、それに充てる教員の時間的保障が何よりも重要であるということは再度確認しておきたい。

1つの対策として、授業参観に替るものとして、授業報告レポートがある。この問題点については2で前述したが、滋賀県立大学環境科学部では、「過去3年間の教育の経過をたどり、学部設立当初の教育理念がどこまで達成されたか、達成されなかった箇所にはどのような問題があったのか」を目標として、各教員が「私の授業」を特集とした『年報』の中で自らの授業の報告を行っている⁹⁾。こうした試み等、教員の授業改善の集团的取組を、ともかくも各学科、学部で、初めはどんな小規模でもとりかかると、そして、その取組での少しでも効率的な運用法、検討の仕方等の情報を本センターとして提供すること、これが公開実験授業を通じた教員の相互研修のさしあたっての課題であると考えられる。

註

- (1) 一般教育学会編『大学教育研究の課題』玉川大学出版部、1997年、242頁。
- (2) 大学審議会『21世紀の大学像と今後の改革方策について——競争的環境の中で個性が輝く大学——（中間まとめ）』平成10年6月、46頁。但し、京都大学の「FD調査」では、「FD（ファカルティ・ディヴェロプメント）」という言葉、あなたはどの程度耳にしますか」との問いに対し、「聞いたことがない」という答が49.7%を占め、「FD（ファカルティ・ディヴェロプメント）」という言葉の意味を、あなたはどの程度御存知ですか」との問いに対し、「まったく知らない」という答が51.7%を占めている。尚、本調査は1997年度に京都大学に在籍し、かつ1998年4月1日時点での現職の教授、助教授、専任講師全員に対して行われ、1661通を発送し、現在までに761通の回答を得た。
- (3) 拙稿「参観者はどう変わったか」京都大学高等教育教授システム開発センター編『開かれた大学授業をめざして』玉川大学出版部、1997年、121-124頁。
- (4) 以下、本稿中の参観者の意見、感想は、2年度の参観者に対し、年度終了後に提出していただいたレポート等に基づいている。ただし、適宜、筆者が表記につき調整を行っている。このレポートについては、平成10年度中に本センター叢書として発行予定の『平成9年度公開実験授業の記録』に収録する予定である。尚、本稿中では、参観者の敬称は省略させていただいた。
- (5) 例えば参観者の坪川は、学生にどのようにして教員に歩み寄らせるか、を考え、岡本は、多人数教室において、どのように受講者の注意を引き付け、思考のステップを踏ませるか、を2年目の課題とし、石谷幸治は、高校と大学での教育実践の相違点に注目して、本実験授業に参加した。
- (6) 和光大学授業研究会『語りあい 見せあい 大学授業』大月書店、1996年、11頁。
- (7) 拙稿前掲、130頁。
- (8) 和光大学授業研究会前掲書、17頁。
- (9) 学生、教授者及び参観者に配布したアンケート用紙は後掲の資料1のとおりである。教授者が予想した4つの用語及び学生が何らかの回答を寄せた用語のうち6人以上の回答があった7つの用語についての結果（重複がある

ので計8つの用語)を提示しておく、表1のようであった。A、B、Cのそれぞれの意味は次の通りである。

また、参観者がB=1名、C=1名と予想した「デュ-イ」については、学生の答はなかった。

A=その用語、人物名等は知らなかったが、田中教授の講義中の説明で理解することができた。(知らなかったが、理解できた)

B=その用語、人物名等は知らなかったし、田中教授の講義中の説明では理解することができなかった。(知らなかったし、理解できなかった)

C=その用語、人物名等は知っていたが、田中教授の講義中の説明では納得できなかった。(知っていたが、納得できなかった)

学生の回答50のうち、「寝てしまったので、設問に答えられない」とした者は8名、「田中教授が取り上げた用語、人物名等は全て知っていたし、田中教授の講義中の説明は納得いくものであった」とした者は12名いた。

表1

	授業者の予想	参観者(7人)の予想			学生(30人)の答		
タナトウス	B	A=6		C=1	A=10	B=4	
エリクソン	B	A=1	B=3			B=7	C=2
中沢新一	B	A=2				B=4	C=2
エロス	B	A=1			A=3	B=2	
オールポート		A=1	B=2		A=8	B=5	
Fort da Spiel		A=3	B=2		A=2	B=5	
フロイト		A=1			A=2		C=5
傍目八目					A=6		

この調査の設計に関しては、授業検討会の中で、参観者の意見を入れながら行った。分析も授業検討会の中で行われ参観者の矢野裕俊(大阪市立大学)から、この講義が、学生の「前理解」を崩すということに主眼があるのならば、「オールポート」の理解は主目的とはならないはずで、教授者にとってはどうでも良いことであるが、やはり「オールポート」が気になる学生もいる。専門基礎として知っておくべき用語であれば、もう少し丁寧にやる必要があるのかもしれない、との意見が出された。また、参観者の1人である筆者は、知識提供型の授業であるならばAがより多くなる方がよいが、本授業はそうではなく、授業のメインの部分ではむしろ本時以降の展開を考えれば、BやCが出てくる方がよいように思うということ、但し、「オールポート」等の本講義における枝葉のところではAになるようにすべきであろうとの意見を述べた。

大山泰宏(センター)は、この調査が用語を自由に書かせるスタイルであるため、最初の質問で0や1を答えた人とのタスクの量が違うため、0や1が増える可能性がある。学生たちが何に引っかかるかのレディネスの問題を見ることができないという問題はあるが、こちらで、あらかじめ授業中の用語をいくつか指定し調査する方法もあるとの意見を述べた。

この調査に関しては、鳥居から、学生が回答した用語について、その後学生がどう対処したか(本で調べる、質問をする等)を調べたらどうか等様々な積極的な意見もあり、大山が提案している方法の採用も含め、後期に改めて調査する予定であり、その結果を含めて、後日報告する。概して、このように客観的データを収集して意見交換する方法は、その収集方法の検討も含め、授業検討会における議論の積み重ねの点では有効であるように思えた。この点、参観者の1人であった中井浩一(鶏鳴学園)が、「検討会の参加資格を定めて、共通の問題意識に基づいて議論を積み上げて行かれる方がよいのではないのでしょうか」との意見にも応えうるものとする。但し、この方法は、本実験授業が実験的なものであり、教員相互研修の端緒でもあることから、1回のみでの参加でも可とし、オープンにしていることとの関係では問題が生じる。後者の理由から、授業検討会はほぼ、授業を素材にしたフリートークキングになっているが、「検討会のあり方が自覚的に追求されていない」(中井浩一)との批判は妥当し、この点課題となっている。

(10) 滋賀県立大学環境科学部『年報』第2号、1998年、2頁。学部長の坂本充氏の言。

資料1

1998. 6.15.

講義中の用語等についてのアンケート調査

学部 _____ 回生 _____ 氏名 _____

問

本日の講義の中で取り上げられた用語、人物名等についてうかがいます。この授業の終了の時点で、自分が最もあてはまる状況を表している選択肢の番号に○をつけてください。

0. 寝てしまったので、設問に答えられない。
1. 田中教授が取り上げた用語、人物名等は全て知っていたし、田中教授の講義中の説明は納得いくものであった。
2. 上記のいずれの状況にもあてはまらない。

→ 2. に○をつけた方のみ以下お答えください。

本日の講義の中で取り上げられた用語、人物名等につき、本時間の終了の時点で、次のA、B、Cに該当するような状況があったと思います。

- (A) その用語、人物名等は知らなかったが、田中教授の講義中の説明で理解することができた。
(知らなかったが、理解できた)
- (B) その用語、人物名等は知らなかったし、田中教授の講義中の説明では理解することができなかった。
(知らなかったし、理解できなかった)
- (C) その用語、人物名等は知っていたが、田中教授の講義中の説明では納得できなかった。
(知っていたが、納得できなかった)

そこで、上記A、B、Cの状況に該当する用語、人物名等を（ ）内に記入し、その用語、人物名等をめぐる自分の状況につきA、B、Cのいずれかに○をつけてください。

例1 (ル ソ ー) A B C

例2 (生 態 学 的 分 析) A B C

• () A B C

• () A B C

• () A B C

• () A B C

• () A B C

• () A B C

• () A B C

アンケートへのご協力ありがとうございました。